

「ACE サバイバー」から考える教育分野での「BPS モデル」活用

伊田 勝憲(本学教職研究科教授 臨床教育学、教育心理学)

生徒指導・教育相談の授業を主に担当していることに加え、筆者自身が不登校経験者でもあることから、最近、不登校が 11 年連続で増加している(特にコロナ禍以降に急増している)理由について学内外で尋ねられる機会が増えました。よく言われるように「複合的な要因」であることは間違いないのですが、何がどう複合しているのか、その解像度を高めることが児童生徒の理解と支援には不可欠と考えます。

その際、必ず念頭に置いておきたいのは、2022 年 12 月改訂の「生徒指導提要」90~91 ページに登場した「生物・心理・社会(Bio-Psycho-Social: BPS)モデル」です。「バイオ・サイコ・ソーシャル」の文字通り、生物学的要因と心理学的要因と社会的要因をトータルに考え、それらの相互作用や循環的な因果関係を想定します。まさに「複合的な要因」を捉えるのにピッタリの枠組みです!

精神医学の分野では 40 年以上の歴史がある BPS モデルも、教育分野での本格的な活用はこれからです。従来の教員養成・研修のカリキュラムには、特に生物学的要因について考える視点が弱かったと思います。

そういう筆者自身、高校は普通科文系クラス出身ですが、幸いにして生物を選択履修していて、大学では心理学を専攻しつつ教育社会学のゼミに潜っていた経緯もあり、BPS モデルの学際的な視点に興味を持ちやすかったのかもしれません。そして、昨今重視されている文理融合・STEAM 教育の視点と BPS モデルの相性の良さにも興味を惹かれています。

さて、いよいよ本題ですが、この BPS モデルは不登校を含む長期欠席の背景の理解はもちろん、あらゆる児童生徒理解に適用可能と言えます。その中でも特に筆者が BPS モデルのことを強く意識するケースの 1 つが近年注目される「小児期逆境体験(Adverse Childhood Experience: ACE)」です。詳細はぜひ読みやすい書籍を探していただきたいのですが、簡単

に言うと、子ども時代の過酷な境遇(BPS モデルで言えば S=社会的要因)が、成人後の心身(P=心理学的要因と B=生物学的要因)にも影響を及ぼしているという話です。「ACE サバイバー」の研究では、種々の依存症から心疾患に至るまで驚くほど多岐に渡る指標が出てきます。

この影響について読み解くのに役立つのが「エピジェネティクス」(epigenetics)の概念です。これもウェブ検索でわかりやすい解説にすぐ辿り着きますが、「後成遺伝学」とも訳されるように、遺伝子のスイッチを研究する学問分野のことです。私たちは持って生まれた遺伝子の全部を使っているわけではなく、生まれた後の環境すなわち S=社会的要因によって、ある部分の遺伝子のスイッチのオン・オフが切り替わり、後天的に B=生物学的要因が変化する(その結果として P=心理学的要因も変化する)と考えられるわけです。

子どもの「逆境」は、虐待や貧困のみならず、学校での「いじめ」も含まれますし、広くはコロナ禍や地震などの自然災害も含みうる概念です。「不登校」のみならず「病気」による長期欠席の急増も、ACE の概念と無関係ではないのかもしれませんが。加えて、親世代の子ども時代の逆境(S)が、世代を越えたエピジェネティックな影響(B)で、子世代のストレス感受性(B→P)を高めるおそれも指摘されています。

大切なのは、「過去の境遇(S)」による諸々の影響を「現在の境遇(S)」により緩和できるかもしれないという発想です。学校風土・教室文化を含む日常の教育活動のあり方もそうですし、ACE サバイバーの保護者を支援することもまた、子どもの今の「境遇」を変える可能性があります。その前提は「多職種連携・協働」ですが、その際の共通言語の 1 つが BPS モデルになると考えます。

この「バイオ・サイコ・ソーシャル」を合言葉に、これからの新しい教職教養の中身を一緒に作ってみませんか。